

浄土真宗における人間性と救済

——西洋現代真宗学の人間理解——

松 本 デ ビ ッ ド

第一章 序論および研究方法

I. 序論

この研究の目的は、真宗学の新たな研究分野へのアプローチを提唱することにある。本論文では、そのアプローチを「西洋における障害の真宗神学」と名づけたいと思う。この真宗の伝統と教義に対する新しいアプローチは、相互に関連した以下の二点を基礎とする。

第一に、浄土真宗の伝統を障害者の歩んできた道に光を当て、その重要性を十分に認識しながら取り扱うことによって、浄土真宗の宗教的伝統はおのずと再検証されるべき対象となっていく。「正常」の辺縁へと追いやられていた人々、その声も、生き方すらもほとんど顧みられることの無かった人々の視点に立った時、浄土真宗は現代西洋の文脈の中で再定置されるであろう。言い換えれば、西洋において確認され明らかにされてきた障害をもつ人々に関する宗教的、社会的問題は、その思想体系を検証することによって、新たな枠組みを提唱し、従来 of 伝統的視座からは気づき得なかった方法論へと我々を導いてくれるものと確信する。

第二に、本研究の目的は障害者と健常者が共に西洋において、真宗における悟りへの道の宗教的意義、社会的影響、そして現代社会における重要性を見出す道を模索することにある。したがって、本研究は宗教的伝統や神学的思索に対する客観的研究のみをその目的とするべきではなく、同時に接近手段、価値、人間性、そして救済に関わる問いに主体的に取り組んでいくことが求められている。

この研究は「人間であるということの意味とは」という基本的な問いに向き合うことから始まる。そして、私たちが障害者の置かれてきた状況を見据えながら「人間性」についての問いに向き合う時、歴史的、社会学的、法的、政治的といったあらゆる角度から彼らの人間性に異議を唱えることで私たちが正当化してきた不当な取り扱いの歴史を認めざるを得ない。さらに、この問いは宗教的にも重要な意味を含む。なぜなら、おおよそ世界に存在するあらゆる宗教の

伝統や歴史こそが、障害者の人間性を否定する役割を自ら率先して担ってきたことは疑いのない事実だからである。

しかし、そのことについての歴史的検証は本研究の一部に過ぎない。この研究が目指す「障害の真宗神学」とは、人間性についての基本的問いを「障害は超えることができるのか。そして障害を超えることによる人間性の形成を実現することは、果たして可能か」という問いへと昇華させることにある。ここでは、人間性の意味と重要性についての従来の真宗学的視点に批判的考察と変革を与え得るものとして、障害は主要な分析分野として位置付けられる。同時に、現代西洋の「文脈的」パースペクティブを通して真宗を考察すること、言い換えるなら、真宗を障害者の社会的、個人的経験に基づいた視点から考察することは、浄土真宗の伝統がより実践的で変革可能な性質をもったものであることを明らかにすることになる。そしてそのことが、現代の西洋社会の実存的、知的、そして社会的状況のただ中において、確実に多くの示唆を与えることになるであろう。

II. 方法論的アプローチ

現代西洋における「障害の真宗神学」が真宗の伝統の再解釈、すなわち聖教、歴史、および共同体への新たな解釈を試みる時、以下の三点がその立脚点として必要不可欠となる。

- A. 日本の真宗学という学問分野において発達してきた方法論
- B. 現代およびポスト・モダンの西洋における宗教学、神学、さらに比較的新しい学問分野である障害学が採る方法論ならびに論理的解釈法
- C. 障害者の人生経験を通して明らかになってきた実存的、宗教的課題

江戸時代の本願寺派の教学研究は宗乗、あるいは宗学として知られ、宗派としての研究方法論であり、高度に体系化されたものであった。著名な仏教学者のひとりである前田慧雲によれば、この伝統的な浄土真宗の学問方法は（１）非常に精密ではあるが表層的な言語解釈に基づき、（２）浄土教のあらゆる教義を親鸞の（または、覚如や蓮如の）視点から解釈することを目的としながら（３）宗派としての本願寺派の立場を強調し、（４）論題の確立に貢献するものであった。

やがて明治・大正期にわたる一連の教育改革は、浄土真宗の学問形態にも著しい変化をもたらすこととなった。伝統的宗乗は真宗学として生まれ変わり、教団の権威主義から自らを解放することを目指し、歴史や哲学、社会学、さらには系統立った探求方法までも含む西洋のスコラ哲学を積極的に取り入れていった。この大転換の最も際立った例として挙げられるのが、教理史を歴史学的アプローチに則って探求する調査方法論といわれるものである。この方法論は念仏や信心といった主要な教義課題の発達過程を、浄土教經典についての緻密で体系的な思

索を通して辿っていくものである。

事実、西洋における浄土真宗の研究は日本国内のこうした方法論の発展から多大な恩恵を受けている。たとえば、次の二つの方法論をめぐる提言は、西洋における真宗の神学を確立する上で示唆的である。

すなわち、武田龍精氏の新しい真宗学形成への提言に指摘されているように、「新しい真宗学」の形成をするためには、1) 真宗学の内、自己自身を問い、自己の宗教経験を通して、阿弥陀仏との関わりを学問的に、体系化、理論化しなければならない。また、2) 神学がキリスト教のうちで占めると同じような位置と意味を仏教のうちで担わなければならない。武田氏は、「新しい真宗学」は、浄土真宗が「釈迦教」から「弥陀教」へと展開してきたことに見られるように、救済を究極的目的としている根源的に異質の宗教形態であるゆえに、同じく救済中心のキリスト教への平行的近似性をもつものとなるべきであると主張する。

また、信楽峻磨氏による、客観的・科学的方法と主観的・実践的理解のダイナミックな統合の主張も重要な方法論的な視座を与えている。すなわち、真宗学における客観的な解明とは、「親鸞によって体験され、開説されたところの仏教、成仏をめざす教法」である真宗を対象として客観的に把握し、それを分析、統合し、体系的に解明する科学としての学という意味をもつのであり、そのような客観的解明には歴史的研究法と文献学的研究法の採用が必須条件となる。しかし、真宗の教法とは本来的に客観化、対象化を拒むものである以上、そのような科学的な研究法は何れも真宗学の方法論としては限界がある。すなわち、主体的な領解については、その対象としての真宗とは仏教である以上、それは私自身が仏に成ってゆくための教えとして、私に向かって到来するものであって、それはひとえに私にとっては主体的に領納されるべき性格をもっている。そこで、両者の統合、すなわち客観的、科学的な解明と、主体的、実践的な領解の相関が必要であり、「両者の間にはきびしい矛盾対立の緊張関係が続きながらも、しかもまた同時に必ずやより深い次元において、相伴し、統合しうる道がひらけてくる」と、確信をもって提言している。

本研究をすすめる上では、日本において従来展開されてきた真宗学の研究法の特徴である客観的な文献解釈がまず肝要であることは明らかである。しかしながら同時に、その研究は研究者である私自身に意義や価値、そして方向性を指し示し得る主体的な領解に深く結びつくべきものであるがゆえに、研究上光を当てるべき人々の生活や関心事、そして課題について主体的に捉えていくことが必要不可欠となる。

近年、西洋ではこれまで厳然と存在してきた神学と宗教学との間の溝を埋める新たな試みが始められている。

宗教研究における伝統的な西洋の神学的アプローチとして、「神学」という言葉は、もとも

と神々 (theos) についての論述 (logia) ということをギリシャ語では意味していた。しかし、キリスト教の護教論者によってこの言葉が受け継がれると、唯一の神についての体系的な論述や教義を意味するようになっていった。

一方、このような神学的アプローチに対して、19世紀末より宗教への批判的研究が「宗教学」として発達し、伝統的な西洋の宗教学を形成していった。宗教に関する批判的研究 (Religionswissenschaft) は、科学的合理性を宗教研究に適用しようとする企てや、「信仰の立場からする信仰のための信仰」というキリスト教における神学的研究に対する批判から発展してきた。

神学と宗教学は、宗教の世俗化や多元化、さらにはグローバル化の進展や宗教活動の政治化など、めまぐるしく変化する今日の宗教的、思想的状況に対して応答していく必要がある。また、今日では解放の神学、イスラム原理主義、新宗教運動、フェミニズムや障害者の人権運動など宗教の政治化が進み、社会のあらゆる局面で宗教的権威や序列の失墜が進んでいる。宗教的な伝統とその教義は、外から社会的実践と社会的存在としての教団の責任を求められている。さらに、解釈学の展開やポストモダニズムなどが西洋の思想状況に根本的な影響をもたらしているといえる。

最近の神学的研究における方法論の展開の中には、神学的研究あるいは宗教学的研究のいずれにも当てはまらない批判的で構造主義的な新しい神学が存在している。たとえば、N. スマートやF. ウェイリングの神学と宗教学を相互関連的に捉える理解などがその代表である。このような新しい研究では、以前ほど宗教学と神学的研究とが相互に排除しあうことはほとんどなくなっている。事実、これまでのカテゴリーの中ではうまく分類できなかった、批判的で構成的な性格を持った神学に対する関心の高まりが見られる。

また最近、西洋の仏教学者の中には、「仏教の神学」を確立することの必要性を主張する人々がいる。「仏教の神学」とは、現代社会の文化的、宗教的な課題を解決するうえで仏教がもつ潜在的な力を探求しようとするものである。そのような「仏教の神学」の特質として、1) 人間の最も深いところにある実存的な欲求に応える。2) 仏教の神学は批判的な視点を常に持ちつつ、ポスト・モダンの状況における思想的、社会的、文化的な課題に対して応える。3) 具体的な問題に対する新たな解決策を提供する、という3点が指摘される。

さらに、フェミニスト研究の宗教研究への接近により、数々の重要な教義的、方法論的な課題が提起された。

これらの課題はまだごく新しい学問分野である障害の解放神学からも同様に指摘されているものである。こうした宗教研究へのフェミニストからのアプローチでは、脱構築のプロセスを通して、宗教的シンボルをはじめ、言語、文学、歴史、そして教理を批判的分析調査の対象と

した。これは学問的客観性と同様に、既存の権威カテゴリーへの挑戦でもあった。つまり、このアプローチにおいて研究者は、歴史的かつ自己批判的視点に立つことを求められ、「大きな物語」、すなわち包括的理論への挑戦を使命として課されたのである。言い換えれば、フェミニスト研究の宗教研究への接近によって、宗教は現代の多元的状况の中で自らを意味あるものと定義するための、あるいはポストモダン状況からの挑戦に立ち向かうための能力を試されてきたといえる。

ポール リクルールにおける「懐疑的解釈学」の影響を受けて、フェミニスト学、或いはフェミニストの学問的分析が成立してきた。これは社会全体における性差別の問題と、特に性差別を助長するような反女性主義の固定観念を批判的に明らかにしようとする学問的な研究方法でもあり、それと同時に父権制度的抑圧から離れた社会を再構築しようとする社会的運動でもある。フェミニスト神学は特にアメリカを中心とするフェミニスト解放運動とフェミニスト学の一部として生まれた。フェミニスト神学の批判的で再構築的な試みの出発点は、歴史的・社会的な状況の中において、抑圧され沈黙させられてきた女性達の物語や経験にあるのである。

わずか10年ほど前に生まれた仏教におけるフェミニスト神学も同様に「懐疑的解釈学」を採って、仏教における歴史的、教団的な事情と仏教の教えを批判的に検討し、それを再構築しようとする学問的な営みである。この新しいアプローチの一例としてリター グロースの「父権制度後の仏教」といった思想と研究法がある。グロースにおける方法論には、次の三点が含まれている。1) 仏教の行者、あるいは仏教の信者である女性達の隠れた物語を表わそうとする客観的で歴史学的、文献学的な研究法がまず必要となる。2) フェミニストの視点から仏教の基本的な教えとその実践を教学的に検討する。3) 仏教のもつ本来の平等性に反する歴史的、教団的な父権制度を突き破ろうとするフェミニスト的仏教再構築を絶えず追求する。

仏教におけるフェミニスト神学はフェミニスト解放運動とフェミニストの学問的分析より発生してきた営みであるから、「障害者の神学」的な営みにこのフェミニスト神学の方法論をそのまま当てはめることは困難である。両者の間には当然様々な歴史的、社会的、あるいは政治的、教学的な相違が存在するはずである。しかし、以下に指摘するように「障害の真宗神学」的研究の方法論とその究極の目的を考える場合には、仏教におけるフェミニスト神学が豊かな示唆を与えてくれるであろうことに疑念の余地はない。また言うまでもなく、西洋における障害に対する研究と障害の神学の新たな進展は、直接本研究に大きな影響を与えるものであることも明白である。

第二章 障害研究と宗教における人間性と救済に関する問題

I. 西洋における障害者の研究

障害は人類普遍の経験である。障害とは我々がどこまでも個人として出会う経験であり、帰属する宗教、国籍、文化背景、経済状況、性別などいかなる区別も我々を障害の経験者、未経験者に振り分ける条件とはなり得ない。2000年の時点で世界中には約8億4千6百万人の障害者が生活しているといわれ、そのおよそ8割が発展途上国の人々であると報告されている。

しかしながらその一方で「障害者」の明確な定義はないのである。我々が障害について考える場合、まず障害を表す“impairment”と“disability”、そして“handicap”のそれぞれの意味を明確に区別する必要がある。“impairment”とは身体的、認知的、情緒的機能の異常、もしくは損失を表す語である。それに対して“disability”とは、“impairment”の結果として状態であり、“handicap”とは“disability”によってもたらされた社会的に不利な立場を示すものである。障害者といっても、実際は身体的、精神的、知的障害を持つひとと様々である。全ての障害者は医療や介護様式、あるいは文化の中で障害がどのように受け止められているかなどの要因によって種々に条件付けられていく。さらに、同じ障害を持っても、そのレベルはそれぞれである。また、障害の中には進行形のものもあり、先天的なものや、後天的なものもある。このように、その状態やレベルにおいて非常に多岐に渡る障害を持つ人々を「障害者」というひとつの定義に収めることは不可能である。

しかしながら、障害に対する研究に関しては障害の機能的定義を決定することにのみ力が注がれてきた。そのため、従来「障害」は医学的对象、もしくは精神学的対象と見なされてきた。したがって障害者は医学的見地からは「病気であり、治療が必要な者」と見られ、また精神学的見地からは「彼らの経験は個人的病理である」とされてきたのである。それに対して今日西洋の障害に対する研究分野においては、障害は社会的に構築されたカテゴリーとみなす立場が大半を占めるようになってきた。つまり「障害」を定義するための社会的、政治的モデルは、障害者の問題は個人ではなく社会によって引き起こされたものであると主張する。したがって、真の解決法は障害者の障害を矯正することではなく、彼らの社会参加を制限している要因を取り除くことにこそあるといえる。そしてこの視点に立つことによって障害学の研究は、政治経済的次元、あるいは文化的次元において世界中に遍在する「障害者の抑圧」という事実を初めて視野に入れることとなる。この障害者に対する抑圧は、時には差別という形で表れ、障害者を無力化するという形で表れ、あるいは社会からの疎外という形で顕れる。その結果障害者にもたらされるものは、貧困や依存、不可視性、孤立、劣等感、暴力の対象、自己疎外、恥、軽蔑、憐れみ、温情主義的慈善、そしてなによりも「正常」と「人間」に対する誤った認識である。

障害学は障害者自身による障害者の権利回復運動から生まれた新たな学問分野である。公民権運動に倣って、この運動は権限取得と人権、独立と統合、自己救済と自己決定といった考え

を含む。さらに障害学は単なる学問的分野というよりも、むしろ社会に根ざし、社会のただ中で行動することを通して深められていく研究分野であるといえる。したがって障害学は政治、社会、歴史、経済、医学、文化、そして宗教といった障害者に影響を与えるあらゆる力の考察を目的とする。また障害学は同様に「障害」という言葉そのもの、依存と独立、平等と差異、正常と逸脱、本質的価値を付与された価値など言語のもつ問題にも焦点を当て始めた。現在に至るまで、障害に対する研究は身体障害者を主にその研究の対象としてきた。認識障害を持った人々の経験をその研究対象に加えるという最近の流れは、従来障害学という学問自体が抱いていた先入観や仮定をもう一度厳しく見直すことを要求するという点において、この分野にとって大きな挑戦であるといえる。

II. 障害の神学

障害のキリスト教神学は障害者がキリスト教の伝統を障害者のパースペクティブから捉えるという立場をとってきた。障害は重要な神学的カテゴリーとして理解されている。なぜなら、障害は現行の宗教と神学において自明とされてきたものへの挑戦だからである。障害の経験は「障害があるとは?」「信仰や信ずるということの意味は?」といった問題を投げかけることによって、共同体のアイデンティティや、救済の意義、あるいは神のイメージそのものといった問題に直接関与する。キリスト教では、こうした問いはキリスト教徒であるということの意味と同様に、人間であるということの意味についてのより深い内省を促すこととなる。

こうした伝統的な障害の神学に加えて、現代フェミニスト神学にならって「障害に対する解放神学」が近年になり発達してきた。例えばN. アイスランドは「近接可能性」の方法論を強調している。これは(1)障害者が完全に教会の生活に参加できるようにすることと、(2)教会が障害者の社会一象徴的生活への接近が可能になるような方法を発見することを目指している。この方法論は聖書のイデオロギーへの疑問の提示や、解放や悟りへの批判的理論、教団の実践を変革するための社会理論と同様に、障害者の実際の経験を注意深く再認識することを伴う。

III. 障害者の実存的・宗教的課題

現代西洋における障害の真宗神学がとるべき二点の立場はおのずと第三の視点を導き出すことになる。すなわち「障害」は西洋の浄土真宗研究の中でも現代の解釈学分野において、第一義的カテゴリーとして取り扱うべきものである。この作業によって、人間性や実践、悟り、救済の重要性に関する問いがどのように伝統の中で取り扱われているかを新たな視点からもう一度見直すために、西洋が現在抱えている障害者の社会的、実存的、宗教的課題に対して真宗

の思想や実践がもちこまれる。

しかしより重要なことは、障害についての研究が教義の発展の検証にとどまらず、障害者の実生活に基づく経験と宗教に関する課題に焦点を当てることにある。それゆえ、この神学的検証は障害者の生活体験と宗教的関心より生起し、その関心に応えることを目指すものであるべきである。したがって障害者、もしくは障害者の介護に従事する人々に行うインタビューは彼らの仏教に関する考えや各々の体験を明らかにし、本研究の試金石となるであろう。実際本研究の研究対象となる課題やカテゴリーは彼らの経験や関心から生じたものである。

最後に、本研究の目的は浄土教ならびに浄土真宗の実践的かつ変革可能な特性を模索することにある。これは障害者と健常者両者の社会的、宗教的生活を本質から変化させる可能性を秘めた特質である。

IV. 仏教伝統における障害に関する諸問題

最近の障害学研究の中には、宗教の役割について障害を引き起こす役割と克服する役割の両面から考察していくものも現れはじめた。歴史を通じて障害者は差別や困難の中で苦悩してきた。これにはさまざまな要因が考えられるが、障害が前世で犯した個人の悪行に対する神の罰であるとしたり、前世の悪業の報いであるとする宗教的信念がその要因の一端を担っていることは間違いない。またステレオタイプや非寛容、スティグマの社会的付与、無視、疎外、温情主義的慈善と管理、あるいは世俗的な民間信仰もその要因として挙げることができる。

しかしながら、これまでのところこうした研究が取り扱う宗教はもっぱらキリスト教とユダヤ教にのみ限られ、障害者も主に身体障害者に焦点が当てられているのが現状である。宗教と知的障害者の関係を扱ったものはほとんどなく、ヒンズー教やイスラム教、仏教といった東洋宗教についてのこの分野の研究は残念ながら皆無といっても過言ではない。こうした現状の中で、我々が非西洋宗教の概念、実践、信仰体系をただ無批判に受け入れるのではなく、むしろ厳しい目をもって考察することを通して、障害をもった人々の生き方にこれらの宗教がどのような影響を与えているのかをより深く理解することが可能になるといえる。

障害者に慈善を施す仏教施設の存在は、歴史的証拠として僅かではあるが認めることができる。例えばM. マイルズが言及しているように、紀元前三世紀のアショカ王による障害者のための保護施設が存在が記録に残されている。このような仏教における障害と障害者に対する実践的アプローチは紀元四世紀のブッダハサや六四五年のハルシャにおいても行われていたことが伺える。しかしながら障害に対する研究は、そうした仏教施設の歴史的証拠を批判的パースペクティブで再考察した結果、施設設立の基礎となる慈善が実は彼らの保護を目的とした父権制度的抑圧であったということを明らかにした。換言すれば、障害者が健常者と同等の価値や

機会をもった存在とは認められていなかったということをそれらの施設の存在は示している。障害者は仏教的保護や慈悲によって恩恵を受けることはあっても、決して健常者と同等に扱われることはなかったし、同等の尊厳をもった存在として見なされることのなかったのである。こうした批判的歴史検証を経て、近年東西の仏教活動家は障害者の生活の質的向上を目指すだけでなく、「同等の尊厳」の回復をも活動の主要な目的と考えるようになった。

上記で挙げた少数の歴史的史料は別として、仏教において障害がどのように取り扱われてきたのかを示すほとんどの史料は、経典、注釈、律の中に認めることができる。これは仏教と障害者に関する歴史的、宗教的、教義的背景を示すものである。

第三章 浄土真宗における人間性と救済の問題—障害者のペースペクティブより—

障害者の体験は我々が浄土真宗の思想を考察する上で、実に新鮮な視点を与えてくれるものである。したがって真宗思想の再考察を試みるとき、「障害」が分析のための主要なカテゴリーとなることは十分可能である。このときその分析カテゴリーは特に「価値」「境界」「潜在的可能性」の三点に焦点が当てられたものとなる。すなわちこれは人間の置かれた状況や、彼らの救済に関わる問いが真宗の伝統の中でどのように扱われてきたのかということを明らかにするために非常に有効な分析カテゴリーであるといえる。

I. 浄土真宗における価値をめぐる問題

浄土真宗における「価値」の問題は自己と他者、身体と心、有益と無益についての議論を促す。これは人間およびあらゆる衆生の存在意義に関わる問題である。仏教において法は究極的な価値を付与されている。阿弥陀仏の誓願は純粋な希求と心を表している。浄土とは仏の慈悲が働く場所といえる。一方、そのような阿弥陀仏の本願に目覚める衆生の存在について考えるとき、悪に関わる問題は親鸞思想の核ともいえる。親鸞は衆生、特に人間について言及するとき、「凡夫」「悪人」「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら」「非人」といった表現を多用している。

このような浄土真宗の悪や悪業の問題が障害者の視点に立って改めて検討されたとき、彼らが潜在的にもつ革新的特質がより鮮明になってくる。

障害者は社会が（あるいは慣習が）我々の存在価値を身体と心の相対的な有無と結びつけて判断することによって、しばしば自らの存在意義を疑問視される状況に追いやられる。それは、彼らの本来的価値が「不完全な者」というイメージによって決定されてきたと同時に、彼らは従来功利的価値の尺度によってその存在意義を計られてきたということを意味する。すなわち、彼らの人間としての価値は生産性や社会への貢献というレベルに基づいて相対的に判断されて

きたのである。それは、もつべき機能をすべて備え、しかもそれらすべてが正常に機能してはじめて人間と見なされるという従来の定義において、ひとが有益な存在と無益な存在とに決定的に分けられてきたという事実を明らかにしている。

既に見てきたように、「障害とは“健常者”によって不当な扱いの対象となった人々のことを指す」という言葉が示す通り、障害は社会によって構築されたカテゴリーであるとするのが、西洋の障害学においては主流である。障害に対する研究は同時に、物質主義的世界において障害がしばしば経済的価値と結びついて定義づけられていることを私たちに示してくれている。すなわち、ここで「健常者」とは労働可能な者を指し、社会の生産活動に貢献可能な者を指しているのである。したがって、そうした能力を備えた者は人間的に価値のある者と見なされる一方、そうした能力を十分にもたない者は無用、無能、負担、障害として、その人間的価値すらも貶められることとなる。それゆえ、西洋では障害者の存在価値に関わる問題は客観的、外的、社会的、相対的構成概念としてこれまで理解されてきたのである。

親鸞の悪の概念に対するパースペクティブがその当時の歴史や、社会状況を反映していることは間違いない。「具縛の凡愚、屠沽の下類」という彼の言葉からは、当時の社会階級制度を超えた彼の幅広い交流と深い宗教的目覚めがはっきりと伺える。（「具縛」とはあらゆる煩惱に縛られ、がんじがらめになっている我々の存在を表す言葉である。）また、彼が「悪」「悪人」というとき、そこには農民や商人、獵師、乞食、階級制度から排除された者、そして殺生に携わる者も含まれている。歴史家達はそのように親鸞が示した「悪」や「悪人」の社会的意味に関してさまざまな理論に基づき解釈を行っている。

親鸞の著作の検証は、本来的价值と功利的価値を取り入れながら世間、出世間のいずれにも影響を及ぼしている複雑な価値システムの姿を露にすることになるだろう。我々人間は階級社会に支配されながら生きているが故に、あるいは悟りを得る行を収める能力に欠けているが故に悪であり（功利的価値）、同時に我々すべてが人と生まれた瞬間からその存在自体が悪である（本来的价值）ということが親鸞の著作の随所に述べられている。

したがって、親鸞の思想はこの論議に対し新たな洞察をもたらすものであり、おそらく「障害」の新たなモデルを提示することになるであろう。親鸞は宗教的側面から、悟りを得るために障りとなるもの、妨げとなるもののメタファーとして「障害」という語を使用している。障礙についての彼の深い思索は世間、出世間両方のパースペクティブを包含した複雑な価値システムの産物であるといえよう。

さらに親鸞思想において強調すべき点は、自力の行が無力であるということは、そのまま人間は本来無力であるという事実を明らかにしたものであるということである。往生をもたらす有効な状態から我々の心と行為を妨げている疑蓋が人間には本来備わっているとするのである。

すなわち、疑蓋とは本願に対する単なる個人の無知についてのみ語ったものではなく、むしろ「煩惱や悪業、誤った智慧にまみれた衆生海」である我々にとって根源的無知や無明はまさに生得的性質であるということをこそ明らかにしているのである。その一方でこの疑蓋に決して侵されることのないものが、阿弥陀仏より我々に直接振り向けられた信心なのである。

親鸞思想の中で一貫して使われている障害について理解する場合は、それがメタファーであれ、直接言及したものであれ、非常に慎重な作業を必要とする。障害という語句を使用することによって、親鸞は衆生の無知や疑い、無明について述べようとした。彼によれば障害とは正覚を得る妨げとなるものであり、悟りに対する人間の性質についての比喩的描写である。障害という言葉を通して親鸞が主張してきたことは、我々はすべて悟りを得ることに關しては多くの障害をもつ存在であり、それゆえ唯一我々に残された道は、来世における救いを一心に阿弥陀仏の頼むことであるという衆生の事実であった。しかしながら、いわゆる「健常者」にとってはそれが非常に斬新な思想として響いた反面、障害者にとってその思想は俗世の差別と闘う十分な力とはならず、また、彼らが本来もっている真の人間性や救済の可能性を白日の下の引き出す要因ともならなかった。

しかしながら、我々が通常有効であると考えている自分の能力や独立独歩に対する自信が、実は我々の根源的無力と同じことを意味していると親鸞が見抜いたことは非常に重要である。その一方、逆説的方法で、自らの悪に対する深い自覚、それは自身の限界や業縁による障りに対する自覚であるが、そうした自覚がそのまま無限の慈悲と解放への深い自覚となるとしたのである。言い換えるならば、我々が普段当たり前としている自己の正常性や、能力、有益性、人間性が問い直され、改めて考え直す必要に迫られたとき（それはおそらく障害者との出遇いを通して起こりうる瞬間であるが）、我々は初めて自らの悪に目覚めることが可能となる。そして、自身の差別意識や、他人の身になって行動していないという事実が、自分自身の内に真剣な課題となったときこそが、本願の働きによってあらゆる障りや疑いが打ち破られる瞬間なのである。

有名な『歎異抄』の一節「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。」は、しばしば「悪人こそが阿弥陀仏の誓願によって救われる者である」もしくは「悪人成仏」の一節として解釈される。つまり、計り知れないほどの悪業に束縛され、身動きの取れない者は、その悪業の重さゆえ、いかなる自力の行もその束縛から逃れる道とはなり得ない。しかし、仏の誓願はまさにそのような者に対して向けられたものであるという理解である。

II. 境界をめぐる問題

世界中いたるところで、障害者はしばしば人間生活の周縁部へと追いやられてきた。彼らは

たいてい「健常な」社会から排除され、就業や教育、交流についての平等な機会をことごとく奪われてきたのである。したがって本節で取り上げる問題は、社会の障害者に対する没交流、あるいは制限に関わる問題である。

宗教的立場から眺めると、この「境界」の問題は排除と包含、共同体や求道への参与と疎外、そして意識と信心についての考察である。

特に排除と包含の二分法は仏教の中でしばしば現れる問題である。律では障害者の僧伽への参加に対して様々な条件を設けている。浄土教は排除と包含の緊張関係の中で興ってきた仏道であるともいえる。一例を挙げれば、聖道門から除かれてきた凡夫は浄土門の中に収めとられる。自力を通して往生を遂げることのできない悪人は他力の働きを通して往生を自覚することができる、などがある。

親鸞の悟りに対するパースペクティブは社会慣習と無縁ではなく、むしろそうした慣習を十分念頭に置いたものであることは明らかである。例えば、親鸞の「非人」と「是人（善人）」との対比は自明化された社会的価値観の完全なる逆転といえる。すなわち、従来の社会的価値観に従えば、「非人」とは社会の底辺の人々や下層階級の人々のことであり、一方「是人」とは貴族階級、上流階級に属する人々のことであった。それに対して親鸞は宗教的意義に基づいた体系を顕した。つまり、「非人」とは疑いやはからいを心に抱いた人々であり、それに対して「是人」とは阿弥陀仏の誓願を信ずる人々のことなのである。

西洋の障害の神学が障害者の教会コミュニティへの完全参加を阻む身体的、精神的バリアに着目したことは興味深い。これによって、全米障害者法では障害者を礼拝や学習の場から実質的に閉め出すような身体的バリアに関して、宗教が担うべき重要性について取り上げている。さらに、障害の神学が視野に入れるべきバリアは、すべての人間にとって、個人が教会への真の参与を願うときにそれを妨げるあらゆる障壁へと拡大していった。

一方、仏道や僧伽への参与についても、この西洋の障害の神学から学ぶべきことは多い。真宗寺院や、その本堂、さらにその他の集会所の建築構造をこの観点から見直すことは非常に重要ではないかと考える。さらに、御同朋御同行の共同体の中に障害者が真に加わるための道を模索することが、浄土真宗にとって非常に重要な課題となるであろうことに疑いはない。なぜなら、寺院や僧伽への参与は、聞法やその共同体の援助を通して功德を得ることができるということを意味しているからである。この僧伽の概念は西洋のような正義や公正に基づいたものではなく、むしろ、調和や相互に学びあうこと、そして相互転成を意図したものであった。それゆえ、仏教僧伽の本来の意味へと回帰する試みから、西洋は多くのことを学ぶことができるであろう。

親鸞が理想とした宗教共同体は（１）平等主義（あらゆる衆生はすべて仏の子供である）と

(2) 同輩(御同朋御同行の社会)を基盤としたものだったといえる。しかし、批判的考察を通して我々は、実際の状況に目を向けることや求道への参加に関する前提条件の見直しの必要性を痛感することになる。おそらく、歴史的に排除されてきた人々を受け入れることは「大行」につながる道となるであろう。なぜならそのことによって、従来自明視してきた自己や他者についての仮定が問い直され、誓願の慈悲の働きへの気づきに我々は導かれていくことになるからである。

III. 潜在的可能性をめぐる問題

障害者の生活においては彼らが「健常者」と同じように生活できないということがしばしば強調されてきた。こうした社会風潮に異議を唱え、「なにができないか」という障害者の限界から、「なにができるか」という彼らの潜在的可能性へと人々の目を向けさせることに成功したという意味で、障害者の権利回復運動や、徐々に発達していった障害者自身が自らのアイデンティティを肯定的に捉える傾向などが果たした役割は大きい。言い換えれば、障害者自身のもつ潜在的可能性、つまり彼らが障害と共に充足感に満ちた生活を送ることのできる道への認識が高まってきたといえる。これはある意味では、いわゆる「正常」「非障害者」という言葉によって人間の能力に評価を下すようなシステムには依存しないということを意味している。さらに、いうまでもなくこうした視点の転換は、あらゆる人間の宗教生活にも有効な示唆を与え、大きな影響を及ぼしうるものである。

したがって、本研究においてこの「潜在的可能性」の問題は、浄土真宗の思想を西洋のコンテキストから考慮する上で第三の非常に重要な焦点となるであろう。すなわち、「潜在的可能性」の問題は真宗の仏道における認識と信心の意味、救済、超えるということ、転成についての再考察を導くことになる。

批判的考察の過程で生み出される問いのひとつは行と信心に密接に関わるものである。行信論は長年真宗思想の中核をなす問題であった。この問題の全容と詳細はこの論文では割愛するが、本研究はひとつの問い、すなわち「障害者にとって信心と念仏の行はなにを意味するのか」という問いを投げかけることによって、行信論の再考察を試みたものといえる。

親鸞にとって行と信心はともに阿弥陀仏の願心より我々衆生に振り向けられたものであった。この親鸞の思想はこれまで我々が抱いてきた自力に対する理解に完全に逆行したものであった。親鸞は他力を往生のための種々の行を修める我々の能力の完全否定として捉えている。

浄土真宗教学の歴史のなかで、親鸞の複雑な思想体系を理解する試みは行信論に関する二つの流れを生み出した。ひとつは法と超越の特質にまず注目し、それを親鸞思想の第一義的特徴として捉える流れであり、もうひとつは衆生のありかた、すなわち行を通して得られる精神の

過程と変成になによりも重点をおく流れである。前者において往生をもたらす行は仏の行であり、阿弥陀仏の大悲の願の働きとして顕現してくるものである。

一見するとこのふたつの流れには互いに相容れない歴然とした教学上の差が存在し、常に対立の関係にあるようにみえる。しかしながら、一度障害者の視点に立ったときに我々がなすべきことは、それぞれの理論が障害者の置かれた状況をどのように言い当て、彼らにとって最も深刻な課題にいかに応えているかということを改めて吟味することではないだろうか。

例えば、法の働きに重点をおいた前者においては、通常の生活を送ることすらも困難とされる人々へのより確かな可能性を示すものとなり得る。一心に阿弥陀仏の誓願に帰依し、来世での浄土往生を楽しみに待つことによって、彼らは究極の安らぎを見いだすことができると考えられる。しかしながら、特に西洋の障害者の権利回復を支持する者がこの理論を全面的に受け入れる可能性は低い。彼らにとっておそらくこの理論は、障害のネガティブな特徴を強調し、障害者が受動的、従属的立場を甘受する状況を助長するものとして映るであろうし、それゆえそうした危険性を決して看過することはないであろう。そのような観点から見た場合、親鸞の表現は非常に問題があるといわざるを得ない。

一方、後者の立場は積極的な行と信心の認識の側面に重点がおかれている。このような教義は人間的価値を貶められてきた人々への励みとなることは間違いない。しかし、仮に身口意が往生のための不可欠要因であるとすれば、重度の障害を背負った者にとってそれは悟りへの道が閉ざされてしまったことを意味する。

聖道門においては、悟りを願わない者、有効で必要な行を修めようとしない者、智慧を認識することのない者は、生死の苦海から抜け出すことはかなわないとされている。このような考えは自力の行の伝統の中において、より顕著に認められる一方で、他力の信心一念仏の行の中においてもまたその存在を認めることができるのである。もし行としての念仏が究極的にはその行に破れることを目的としているならば、深刻な身体的、精神的障害を抱えている者にとって、念仏を行じることには何の障害も存在しない。

もし信心が認識と同義であるなら、あるいは三昧のような深淵な到達状態を意味するのなら、重度の身体的、知的障害を伴った人間には信心を得ることは不可能ということになる。たとえ信心が単に、はからい棄て阿弥陀仏の誓願に帰依することを意味していたとしても、そうしたアプローチは彼らにある程度の意識レベル、関心レベルを要求していると思われる。もし信心が何もできない人間を対象としているなら、そのとき初めて信心は真宗の救済の意義と密接に関わることになるのである。

真宗における救済の性質についても同様の視点から考察していかなければならない。

親鸞は著書の中で、我々の実存的問題からの救済について阿弥陀仏の「極い・済い」、「救

け」、「救済」といった表現を用いて言及している。これらの表現は親鸞特有のものではなく、むしろ仏教一般にわたって広く使用されてきたものであり、救済の概念は他宗教においても広く認められるものである。しかしながら、この救済の概念を「即得往生」「すでに智慧を得て仏に成るべき身となるは」「正定聚」「不退転」「如来と等しき人」などという表現によって、具体的内容を明らかにしたという点に親鸞思想の特色がある。しかしながら親鸞死後、この救済の問題については真宗教学の伝統の中で、現世において法徳とともにあくまでも賜るものであるという極端に受動的な立場が取られるようになっていった。これによって、救済はいかなる体系も伴わず、経験や体験といった側面からは切り離された、ひたすら死後の来世において成就されるものと理解されるようになっていったのである。

障害をもつ者にとって、救いが死後の浄土においてのみ成就されるというのは、今現在自らが背負っている障害にひたすら耐え、来るべき来世において唯一望みを託すようにといわれているのも同然であった。浄土往生ということはこの場合、障害から解放され、非障害者となって生まれ変わるということを意味している。こうした救済についての理解は深刻な問題を孕んでいる。最も重大なものは、もしも阿弥陀仏の誓願が往生について何らかの条件を課しているとしたら、その願の働きは果たして「一切衆生の救済」を呼べるのか、という問題である。しかし、すべての衆生がその行や信にかかわらず、また認識や参加の有無にもかかわらず既に救われているとすれば、真宗は果たして仏教といえるのであろうか。障害者の視点に立った浄土真宗へのアプローチは、超越や転成、救済のより深い意味を明らかにすることが求められるという点において、大きな挑戦であるといえる。

明らかなことは、親鸞のこの問題に対する独自のアプローチは既存の浄土教思想に確かに裏付けされたものだということである。しかしながら、彼の死後「即得往生」の解釈については二つの流れが成立していった。そのひとつが既に述べたように、即得往生は来世での往生が定まったということの意味すると捉えるものである。それに対して、即得往生とは現世においてこの身がそのまま往生を遂げることであるとするのが、他方の解釈である。

それでは、後者の見解は障害者の抱える問いにどのように応えることができるだろうか。障害を業や運命としてただ受動的に受け入れる代わりに、この身のままに「生まれ変わり」充実した力強い人生を歩む可能性を示唆することができる。真宗の信心一念仏の求道は救済が個人あるいは共同体の深い転成にかかわる止むことのない働きを意味していると言うことが可能であろう。この働きに照らされることによって、人間性について我々が信じ込んでいたあらゆる前提が厳しく見直されることになるのである。転成とは、従来不変と思われていた境界（これは身体、考え方、政治、社会、宗教にいたるあらゆる境界を含む）を乗り越え、個人や共同体内で転ぜしめることを意味する。

第四章 結論

本研究では「障害」を浄土真宗の現代的解釈学における主要なカテゴリーと位置づける重要性について主張してきた。現代西洋における「文脈的」パースペクティブ―障害者の生き方や関心事を自身の立ち位置とする―を通して真宗を再考察することによって、真宗の伝統は人間性や救済の意義について従来とはまったく別の形をとって我々に語り始めた。浄土真宗の思想に対する伝統的アプローチは、大乘仏教や浄土教の伝統に基づいてこの問題を取り上げてきた。すなわち、ここで問われる課題は、悟りへの道や行、信心、証、浄土往生、阿弥陀仏と浄土の根幹に関わるものであり、真宗の核ともいえるそれらの性質を改めて問い直すものであるといえる。そして浄土教の諸師たちは様々な角度からその問いに対する答えを試みてきた。

一方、西洋の障害者の視点に立ったとき、浄土真宗は新たな宗教的課題を突き付けられることとなる。今日においても、障害者の価値や、立場、そして人間性はしばしば否定的に捉えられてきた。こうした課題に対して西洋が出した答えは社会的立場に立ったものであった。すなわち、障害者の社会的地位は非障害者による社会差別やステレオタイプ、価値判断によって形成されていったとするものである。社会にこの問題の解決法を見いだそうとする西洋の立場は平等、フルアクセス権、完全参加、価値自由を求める動きへと発展していった。一方、宗教的側面からの解決法は障害者用傾斜路などの実的手段と、「障害をもった神」という概念に代表される宗教的メッセージの変革の両方を含んでいた。

それでは現代西洋社会において、浄土真宗は障害者に対してどのような示唆を与えることが可能であるか。これは同時に浄土真宗の思想は障害者の視点に立ったときにどのように捉え直されるかという課題でもある。

深刻な身体的、または認知的障害をもつ人々は、仏道を完全に修めることは到底不可能であると見なされてきた。我々がすべきことはすべてのはからいを棄て、ただ一筋に阿弥陀仏の名と誓願の働きに任せることであるとする伝統的な真宗学の立場もこうした認識に支えられてきたといえるだろう。すなわち、救いに目覚めることができるのは往生のためのあらゆる自力が無効であるということに深く気づき、それゆえ報恩感謝の念をもって名号を称えるときのみである。重度の身体的、認知的、情緒的障害を抱えた者にとっては、これが唯一の望みである。

一方でこのパースペクティブに立ったとき、そうした障害をもつ者にとっては信心に目覚めて熱心に名号を称え、根本的な意識変革を知覚することを盛んに強調する思想は受け入れ難い。

ここで我々は第三の立場にも注目すべきであろう。それは障害者の身の事実を受動―能動という二元論の世界を超えて捉えるものである。この立場に身を置いたとき、阿弥陀仏の本願が真実であるならば、伝統的な行の体系や概念は本願の働きの何の障りにもならないはずである

ということが確信をもっていえるだろう。そうであるならば視覚や聴覚、そして認知能力に障害をもった西洋の人々にとって、念仏は決して真新しいものではないはずである。

さらに、浄土往生のための一定の行が要求されないとすれば、「行者なき行」「思想家なき思想」という概念に新たな意味を見いだすことができるのではないだろうか。往生をもたらす行の果てしない広がり、障害者を排除していた最後の境界を突き破る道を開いていくに違いない。

障害に注目することの宗教的意義は、自力と他力についての伝統的な二元論の再解釈を促す点にあるといえる。浄土真宗の「他力」の働きを具体的に表す「利他」と「他利」の概念が、その「他」が紛れもなく自身のことであるという体験の中でより明らかになってくる。すなわち、信心の獲得とは、自分のはからいや思いが全く役に立たず、実体化し概念化していた自己の存在がことごとく打ち砕かれていくときの痛みを受け入れることである。そして、そのままの存在として自己を受け入れたとき、宗教的意味において自身が障害をもった存在であることに気づくことができる。このような体験がすなわち智慧への目覚めといえるだろう。そしてこの目覚めにはいかなる身体的、精神的条件も要求されることはない。おそらくこれは、「浄土には障害をもった人間は存在しない」という主張についての新たな解釈を可能にするであろう。

西洋の障害者権利回復運動と障害学の焦点は障害者個人と社会とのつながりである。西洋社会の傾向として、一般に宗教も社会とのつながりという点で語られることが多い。したがって、障害の神学を含む西洋の解放神学にとって、救済や解放は来世で起こりうる希望であるから、現在の運命は受動的に受け入れるべきであるという論理はもはや成り立たなくなってきた。むしろ、障害が社会によって構築されたものであるなら、そこからの解放はやはり社会との連携なくしてはあり得ないという考えが広く受け入れられるようになった。

浄土真宗の思想が障害者の生活体験を通して明らかになるということは、非常に異なった社会的、歴史的、宗教的文脈の中においてその思想が「再解釈」され、理解し直されるということの意味する。ここでの「解釈」とはあらゆる二元論からの脱構築を含み、殊に解釈する側とされる側という概念からの脱却を目指す。これは同時に人間と思想の相互変革を意味する。思想の再解釈が意図するところは、宗教的伝統や経験における根源的変化をもたらすことであり、我々を新たな世界への目覚めへと誘うことである。

それゆえ、本研究の分析の結果として、我々は人間性というものが「解釈」に基づいたものであるということに気づくことができるといえる。つまり人間性とは、能力と能力の欠如をはじめ、恥と感謝、弱さと強さ、疎外と充足、無益性と普遍的価値についての解釈に基づいて形成されたものだといえる。その気づきのうえで、さらに我々は人間性を「超えること、転ずること」としてみることができるようになるであろう。それはすなわち、障害を超え、自身と世

界とを人間性の中に転ぜしめることを意味する。

本研究の試みを通して、およそ八世紀前に興った日本宗教である浄土真宗は、二十一世紀の西洋の障害についての思想に新たな光を与えてくれるということが可能だと思われる。同時にそうした現代思想が、真宗の伝統についてその内部に潜む要素についての再考を促していると言することができる。(註記省略)

主要参考文献

I. 方法論—Methodology

English Texts

Derrida, Jacques. *Speech and Phenomena*. Chicago: University of Chicago Press, 1985.

_____. *Of Grammatology*. Chicago: University of Chicago Press, 1987.

_____. *The Margins of Philosophy*. Alan Bass, trans. Chicago, University of Chicago Press, 1982.

Eliade, Mircea. *The Quest: History and Meaning in Religion*. London: University of Chicago Press, 1969.

Eliade, Mircea. *The Sacred and the Profane: The Nature of Religion*. W.R. Trask,

Foucault, Michel. *Madness and Civilization*. NY: Pantheon, 1965.

_____. *The Order of Things*. NY: Pantheon, 1970.

Gadamer, Hans-Georg. *Truth and Method*. 1960.

Ricoeur, Paul. *Hermeneutics and the Human Sciences: Essays on language, action, and interpretation*. New York: Cambridge University Press, 1981.

_____. *Freud and Philosophy: An Essay on Interpretation*. New Haven: Yale University Press, 1970.

Commentaries and Compilations

Caputo, John D. *Radical Hermeneutics: Repetition, deconstruction and the hermeneutic project*. Bloomington: Indiana University Press, 1987.

_____. *More Radical Hermeneutics: On not knowing who we are*. Bloomington, University of Indiana Press, 2000.

Dreyfus, Hubert L. and Rabinow, Paul. *Michel Foucault: Beyond structuralism and hermeneutics*. Chicago: University of Chicago Press, 1983.

Gross, Rita. *Buddhism After Patriarchy*. Berkeley, Asian Humanities Press, 1986.

Lopez, Donald S. Jr., ed. *Buddhist Hermeneutics*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1988.

Smart, Ninian. *The World's Religions: Old Traditions and Modern Transformations*. Cambridge: Cambridge University Press 1992.

日本語の著作・論文

大原性実『真宗学概論』京都：永田文昌堂、1956年

金子大栄『真宗学序説』京都：文栄堂書店、1966年

信楽峻磨『親鸞における信の研究』京都：永田文昌堂、1992年

池本重臣「真宗学研究法私見」、『親鸞聖人の教理史的研究』（永田文昌堂、1969年）所収

上田義文「教学の現代化とは何か——根本的理解の一つの試み」『真宗教学研究』（永田文昌堂、

1980年) 所収

- 「{宗学論} 覚え書き——仏教学方法論として——」真宗研究 7 号
 信楽峻麿「真宗学研究序説——その性格と方法論について」龍谷大学論集第338号
 龍溪章雄「真宗学方法論研究学説史」その一・その二、龍谷大学大学院紀要、第5集、第6集
 普賢大円「真宗学研究法についての一考察」真宗学第16号
 源重浩「教説の論理と実存の論理——真宗学方法論の一考察」、真宗学第60号
 武田龍精「神学と真宗学新しい真宗学形成の一試論」、『石田充之の記念論集：浄土教の研究』所収
 前田慧雲「宗学研究法に就いて」、『前田慧雲全集』第4巻
 寺川俊昭「親鸞における学の性質」、大谷大学真宗学会、第33号
 幡谷明「真宗学の課題と方法論についての断想」、親鸞教学、第34号

II. 障害学—Disability Studies

English Texts

- Bishop, M.E., ed. *Religion and Disability: Essays in Scripture, Theology, and Ethics*. Kansas City: Sheed and Ward, 1995.
 Block, Jennie Weiss. *Copious Hosting: A Theology of Access for People with Disabilities*. New York: Continuum Intl, 2002.
 Charlton, James I. *Nothing About Us Without Us: Disability, Oppression, and Empowerment*. Berkeley: University of California Press, 1998.
 Eiesland, Nancy L. *The Disabled God: Toward a Liberatory Theology of Disability*. Nashville: Abingdon Press, 1994.
 Eiesland, Nancy L. & Don E. Saliers, eds. *Human Disability and the Service of God: Reassessing Religious Practice*. Nashville: Abingdon Press, 1998.
 Hane, Mikiso. *Peasants, Rebels & Outcasts: The Underside of Modern Japan*. New York: Pantheon Books, 1982.
 Potok, Andrew. *A Matter of Dignity: Changing the World of the Disabled*. New York: Bantam Books, 2002.
 Ricoeur, Paul. *The Symbolism of Evil*. Emerson Buchanan, trans. Boston: Beacon Press, 1967.
 Ricoeur, Paul. *Oneself as Another*. Kathleen Blamey, trans. Chicago: University of Chicago Press, 1992.
 Thomson, Rosemarie Garland. *Extraordinary Bodies: Figuring Physical Disability in American Culture and Literature*. New York: Columbia University Press, 1997.

English Articles

- Blair, Daniel W. "Christian Theology and Human Disability: a literature review." *Graduate Theological Education and the Human Experience of Disability*. Binghamton: Haworth Pastoral Press, 2003, 69-79.
 Gourney, Charles. "Disability and Destiny." *Journal of Religion in Disability and Rehabilitation* 2, no. 1 (1995), 74.
 Majik, P.J. "Disability for the Religious." *The Disability Rag and Resource*, 15, Nov/Dec 1994, 24-25.
 Miles, M. "Disability in an Eastern Religious Context: Historical Perspectives." *Disability and Society*, 10, 1995, 49-69..

- _____. "Disability on a Different Model: Glimpses of an Asian Heritage." *Disability and Society*, 15, 2000, 603-618.
- Ninomiya, A.H. "Japanese Attitudes Towards Disabled People: Religious Aspect." *Japanese Christian Quarterly*, 52, 1986.
- Thomson, Rosemarie Garland, "Integrating Disability Studies into Existing Curricula: The Example of 'Women and Literature' at Howard University." Ed. Lennard J. Davis and Wink, W. "Women with Disabilities: A Challenge to Feminist Theology." *Journal of Feminist Studies in Religion*, 10(2), 1994.
- 日本語の著作
- 網野善彦『中世の非人と遊女』東京：明石書店、1994年
- 石川准、長瀬修編『障害学への招待』東京：明石書店、1998年
- 基幹運動本部『障害者差別』京都：浄土真宗本願寺派、1999年
- 黒田俊雄「中世の身分制と卑賤観念」『黒田俊雄著作集、巻六』京都：法蔵館、1995年
- 河野勝行『障害者の中世』京都：文理閣、1987年
- 玉光順正、編『ハンセン病と真宗』京都：真宗大谷派、2001年
- 生瀬克己『障害者と差別語—健全者への問いかけ』東京：明石書店、1995年
- 広瀬浩二郎『障害者の宗教民俗学』東京：明石書店、1997年
- 堀正嗣、編『障害者問題ゼミナール』東京：明石書店、1999年
- 松友了編『知的障害者の人権』東京：明石書店、1999年
- 源勝哲『業思想概説』京都：百華苑、1956年
- 森本覚修、小笠原正仁『経典と差別』京都：同和教育振興会、2000年

III. 仏教と真宗学—Buddhist and Shin Buddhist Studies

Sutras and Commentaries in English Translation

- Collected Works of Shinran*. Kyoto: Jōdo Shinshū Hongwanji-ha, 1997.
- The Book of the Gradual Sayings (Anguttara-Nikaya) or More-Numbered Suttas*, Vol. 1. Trans. Woodward, F.L. London: Pali Text Society, 1932.
- The Land of Bliss: The Paradise of the Buddha of Measureless Light*. Trans. Luis Gomez. Honolulu: University of Hawaii Press, 1996.
- The Lotus Sutra*. Trans. Kubo Tsugunari and Yuyama Akira. Berkeley: Bukkyō Dendō Kyōkai and Numata Center for Buddhist Translation and Research, 1993.
- The Mahayana Mahāparinirvāṇa-Sūtra: A Complete Translation from the Classical Chinese Language in Three Volumes*, Vol. 2. Yamamoto, Kosho, trans. Yamaguchi: Karinbunko, 1975.
- Pāṭimokkha*, I and *Mahāvagga*, I-IV. Trans. T. W. Rhys Davids and Hermann Oldenberg. Vol. XIII of *The Sacred Books of the East*. Oxford: Clarendon Press, 1881.
- Śūramgama Sūtra (Leng Yen Ching)*. Chinese Rendering by Master Paramiti of Central North India at Chih Chih Monastery, Canton, China, A.D. 705. Upasaka Lu K'uan Yu (Charles Luk), trans. Sri Lanka: Brighthill Buddhist Centre, 2006.
- Inagaki, Hisao. *The Three Pure Land Sutras*. Kyoto: Nagata Bunshodo, 1994.
- _____. *Nagarjuna's Discourse of the Ten Stages*. Kyoto: Ryukoku Gakkai, 1998.
- _____. *T'an-Luan's Commentary on Vasubandhu's Discourse of the Pure Land*. Kyoto:

- Nagata Bunshodo, 1998.
- Jōdoron (*Discourse on the Pure Land*), D. Matsumoto, trans, in *The Pure Land*, New Series, No. 3, Dec. 1986, 98-120.
- English Texts
- Amstutz, Galen. *Interpreting Amida: History and Orientalism in the Study of Pure Land Buddhism*. Albany: SUNY Press, 1997.
- Bloom, Alfred. *The Promise of Boundless Compassion: Shin Buddhism for Today*. Honolulu: Alfred Bloom, 2002.
- Dobbins, James. *Jodo Shinshu: Shin Buddhism in Medieval Japan*. Bloomington: Indiana University Press, 1989.
- Faure, Bernard. *The Power of Denial: Buddhism, Purity, and Gender*. Princeton: Princeton University Press, 2003.
- Hamilton, Sue. *Identity and Experience: The Constitution of the Human Being According to Early Buddhism*. London: Luzac Oriental, 1996.
- Hirota, Dennis, ed. *Toward a Contemporary Understanding of Pure Land Buddhism: Creating a Shin Buddhist Theology in a Religiously Plural World*. Albany: SUNY Press, 2000.
- Keel, Hee-Sung. *Understanding Shinran: A Dialogical Approach*. Fremont: Asian Humanities Press, 1995.
- Kuroda, Toshio. "Buddhism and Society in the Medieval Estate System," Suzanne Gay, trans. *Japanese Journal of Religious Studies: The Legacy of Kuroda Toshio*, Vol. 23, 1996, 287-319.
- Lopez, Donald. *The Story of Buddhism: A Concise Guide to its History and Teachings*. New York: HarperCollins, 2001.
- McDermott, James. *Development in the Early Buddhist Concept of Kamma/Karma*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers, 1984.
- Nakamura, Hisako. *The Hands and Feet of the Heart*. Ed. Bunyu Fujimura. Los Angeles: TheNembutsu Press, 1991.
- Reichenbach, Bruce R. *The Law of Karma: A Philosophical Study*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1990.
- Queen, Christopher & Sallie King, eds. *Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movements in Asia*. Albany: SUNY Press, 1996.
- Shigaraki, Takamaro. *A Life of Awakening: The Heart of the Shin Buddhist Path*. David Matsumoto, trans. Kyoto: Hozokan, 2005.
- Sulak Sivaraksa. *Seeds of Peace: A Buddhist Vision for Renewing Society*. Berkeley: Parallax Press, 1992.
- Tanaka, Kenneth. *The Dawn of Chinese Pure Land Buddhist Doctrine: Ching-ying Huiyuan's Commentary on the Visualization Sutra*. Albany: SUNY Press, 1990.
- Ueda, Yoshifumi & Hirota, Dennis. *Shinran: An Introduction to His Thought*. Kyoto: Hongwanji International Center, 1989.
- Yamaguchi, Susumu. *Mahayana Way to Buddhahood*. Los Angeles: Buddhist Books International, 1982.
- Yuasa, Yasuo. *The Body: Toward an Eastern Mind-Body Theory*. Trans. Nagatomo Shigenori

and T. Kasulis. Albany: SUNY Press, 1987.

English Articles

Asai, Jōkai. "Exclusion and Salvation in Honen's Thought: Salvation of Those Who Commit the Five Grave Offenses or Slander the Right Dharma." *Pacific World*, Third Series, No. 3, Fall 2001, 125-156.

Bancroft, Anne "Women in Buddhism." in *Women in the World's Religions*. Ed. Ursula King. New York: Paragon House, 1987.

Kakehashi, Jitsuen. "Shinran's View of Other Power: On "the Profound Significance of Other's Benefiting and Benefiting Others." *Pacific World*, Third Series, No. 2, Fall 2000, 61-98.

Murakami Sokusui. "The Joy of Shinran: Rethinking Traditional Shinshu Views on the Concept of the Stage of the Truly Settled." *Pacific World*, Third Series, No. 3, Fall 2001, 5-25.

Okano, Haruko. "Women's Image and Place in Japanese Buddhism." In *Japanese Women: New Feminist Perspectives on the Past, Present, and Future*, edited by Kumiko Fujimura-Fanselow and Atsuko Kameda, 15-28.

Shigaraki, Takamaro. "The Problem of the True and the False in Contemporary Shin Buddhist Studies: True Shin Buddhism and False Shin Buddhism." *Pacific World*, Third Series, No. 3, Fall 2001, 27-52.

Takeda Ryūsei. "The Theoretical Structure of "Birth in the Pure Land": Based on the Meaning of T'an-luan's "Birth Through Causal Conditions." *Pacific World*, Third Series, No. 2, Fall 2000, 31-60.

_____. "Pure Land Buddhist View of *Dukkha*." *Pacific World*, Third Series, No. 3, Fall 2001 177-198.

日本語の著作

浅井成海著『信心の社会性——教学的視点よりの学び』 京都：同和教育振興会、2000年

家永三郎著『中世仏教思想史研究』 京都：法蔵館、1995年

池田行信著『現代社会と浄土真宗』 京都：法蔵館、2000年

池本重臣遺稿『親鸞教学の教理史的研究』 永田文昌堂、1969年

上田義文著『親鸞の思想構造』 東京：春秋社、2004年

石田充之著『浄土教教理史』 京都：平楽時書店、1983年

岡亮二著『教行信証——口述50講』 第一巻教行の巻、東京：教育新潮社、2000年

笠原一男著『親鸞と東国農民』 東京：山川出版、1957年

河田光夫著『河田光夫著作集』 (一) 東京：明石書店、1995年

桐溪順忍著『親鸞はなにを説いたか』 東京：教育新潮社、1983年

香月院深励著『浄土論註講義』 京都：法蔵館、1974年

信楽峻磨著『浄土教における信の研究』 京都：永田文昌堂、1983年

信楽峻磨著『親鸞における信の研究』 京都：永田文昌堂、1990年

重松明久著『日本浄土教成立過程の研究』 京都：平楽寺書店、1964年

仲尾俊博著『真宗と業論』 京都：本願時出版社、1992年

広瀬果著『真宗教済論——宿業と大悲』 京都：法蔵館、1987年

広瀬果著『親鸞の宿業観——歎異抄の十三条を詠む』 京都：法蔵館、1993年

普賢大圓著『真宗概論』 京都：百華苑、1953年

- 藤田宏達著『原始浄土教の研究』東京：岩波書店、1986年
佛教思想研究会『悪』京都：平楽寺書店、1990年
増谷文雄著『業と職業』東京：講談社、1971年
望月信亨著『浄土教の研究』東京：日本図書センター、1977年
森本覚修、小笠原正仁『経典と差別』京都：同和教育振興会、2000年
山口益著『世親の浄土論』京都：法蔵館、1966年